

第9回バイオリフォル国際ワークショップ（クアラルンプール）

益守眞也*¹・石井克明*²・鈴木和夫*¹

第9回目となる2000年のバイオリフォル年次大会は、8月7日から12日までマレーシアの首都クアラルンプールで催されたIUFRO世界大会のグループセッションの一つとして開かれた。

IUFRO（国際森林研究機関連合）に対する日本国外務省のODA（政府開発援助）拠出金を基に、IUFRO-SPDC（開発途上国特別プログラム）の一環としてバイオリフォル事業は1991年に始められた（小林富士雄ら，熱帯林業25：60-70）。今までのバイオリフォル活動の成果として，森林再生を念頭に菌根菌，組織培養，遺伝子操作といった分野の技術開発・研究にたずさわるアジア太平洋諸国の研究者たちの間に友好的なネットワークが形成されつつあり，バイオリフォル・フレンドという言葉も生まれている。例年のワークショップは，各研究者の研究報告を主とする学会発表形式をとっているが，今回は時間が限られていたため，6か国から研究者を招待しカンントリーレポート的な講演をお願いした。



IUFRO 世界大会には約 100

写真 1 プトラ世界貿易センター

Masaya Masumori, Katsuaki Ishii and Kazuo Suzuki: The 9th International Workshop of BIO-REFOR, Kuala Lumpur

*¹ 東京大学大学院農学生命科学研究科，*² 森林総合研究所

か国から2,200人を越す参加者があったとのこと。会場となったプトラ世界貿易センターの12の部屋で、多数の講演や研究発表がおこなわれた。様々なセッションに参加しようと部屋から部屋へ移動する参加者で貿易センター内が騒然としており、バイオリフォルのワークショップは世界大会の5日目であったが、講演をお願いした方になかなか会えず、当日になるまで連絡のとれない方もいた。無事にワークショップを始められるか気がかりであったが、ワークショップの始まる時刻が近づくと、前半のセッションの会場としてあてがわれた50席ほどの比較的小さな部屋に、見知ったバイオリフォル・フレンドたちが集まってきた。

8月11日の14時半から石井の進行で始められた。佐々木恵彦理事長による開会の辞の後、小川眞博士（関西総合環境センター）の基調講演が始まる頃には、たいへん多くの人が集まってきて20名以上の立ち見が出た。

小川博士の講演は、あまり重要視されていない木炭の経済的価値について述べたもので、軽妙な話術と発展途上国の将来に希望を与える話題が、各国の聴衆をおおいに惹きつけた。続いて、今回の世界大会でIUFROから科学功績賞を授与されたり・ヌーシー博士（マレーシア森林研究所）が講演した。マイクロプロバゲーションや菌根菌といった、バイオリフォルが主に扱ってきたテーマに関する研究がマレーシアにおいて、それなりの成果をあげていることをあげつつ、一方で本来の目標である熱帯林再生の現場には有効な技術開発には至っていないことを指摘した。

ウタイワン・サンワニット博士（カセサート



写真 2 小川博士「植林と炭による炭素貯蔵」



写真 3 リー博士「マレーシアでのバイオテクノロジー利用の森林再生一進歩と問題点」



写真 4 サンワニット博士「タイ国におけるバイオテクノロジー利用の森林再生」

大学林学部)の講演も、タイにおけるいわゆるバイオテクノロジーの研究の成果と問題点に言及したものであった。一部私企業が組織培養苗の生産を試みているものの、バイオテクノロジーによる森林再生の促進・省力化は未だなされていないことを指摘した。

3名の講演が終わったところで、会場のベランダに出て参加者全員でにぎやかに記念撮影をおこなった(写真5)。約30分の休憩の後、後半のセッションは200席以上もある大きな部屋に場所を移しておこなわれた。

まず、橋川次郎博士(クィーンズランド大学名誉教授)が基調講演を行った。オーストラリアでの事例を挙げつつ、生物多様性の維持を考慮に入れた森林再生技術の重要性を述べると共に、様々な側面をもつ生物多様性の評価方法を提示した。

アマチャ博士(ネパール森林国土省森林調査

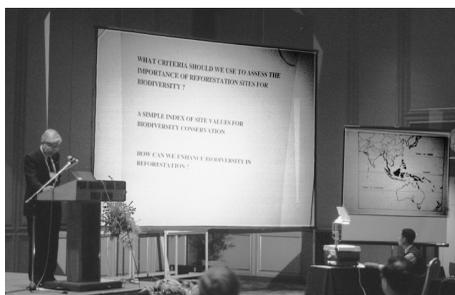


写真5 橋川博士「アジア・太平洋地域の森林再生と生物多様性」



写真6 アマチャ博士「ネパールにおけるバイオテクノロジー利用の森林再生による林業開発」



写真7 バイオリフォル・フレンズ

局)は、たくさんの写真スライドでネパールの様々な森林や樹木を見せながら、ネパールにおける組織培養苗の成長試験の結果などを紹介するとともに、人的交流・技術的交流に果たすバイオリフォルの役割への期待を語った。

最後にインドネシアのスハルディ博士(ガジャマダ大学林学部長)が講演した。インドネシアにおける、菌根菌に関する研究成果や技術開発について述べ、生物多様性や環境に配慮しつつバイオテクノロジーを利用した森林再生を進めるためには、さらなる努力が必要であることを訴えた。



写真 8 スハルディ博士「インドネシアでのバイオテクノロジー利用の森林再生の最近の進歩と将来の問題点」

講演の間、会場の隅で、今まで9回のバイオリフォル・ワークショップの度に発行してきたプロシーディングのバックナンバー希望者を募ったところ、熱帯地域を中心とする11か国の参加者からの送付依頼があった。また、来年度のバイオリフォル・ワークショップの案内を会場で配布したが、詳細を知らせてくれという要望が多数寄せられている。今までのバイオリフォルは、アジア太平洋地域を活動の中心としてきたが、今回のワークショップがIUFRO世界大会に併せて催されたためか、アフリカや南アメリカなどからも仲間に入れて欲しい旨の問い合わせがいくつも来ている。

バイオリフォル・ワークショップは、1992年の筑波大会にはじまり、ジョグジャカルタ、カンガー、タンペレ、バンコク、ブリスベン、マニラ、カトマンズ、そしてクアラルンプールと回を重ねてきた。第10回の節目を迎える次回のワークショップは、今年11月に再び日本で催される。今までのワークショップを成功させてきた各国の研究者と旧交を温めると同時に、新しいバイオリフォル・フレンズも迎え、森林再生の技術についてだけでなく将来に向けての森林の管理法やあり方について、意見交換の場となることを期待している。